

## 第4章－5. 現代の思想と人間像

### 1. フランクフルト学派 — 現代文明批判 その1 —

西洋的文明が人間の自由を奪ってしまった、と説く。

※フランクフルト大学社会科学研究所（1923年創立）

ホルクハイマー、アドルノなど第1世代はユダヤ系学者中心（→アメリカ亡命）  
戦後、研究所再建。第2世代はハーバマスら。

- ◎ \_\_\_\_\_（1895-1973）……単著『道具的理性批判へ向けて』『批判的理論』
- ◎ \_\_\_\_\_（1903-69）……単著『権威主義的パーソナリティ』（作曲家・音楽評論家でもあった）  
共著『啓蒙の弁証法』（1947年出版）

“何ゆえ人類は、真に人間らしい状態に進む代わりに、  
一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでゆくのか”

- ・現代における理性は「**道具的理性**」になってしまった。  
理性が「自然」のみならず「人間」をも管理・支配する状態  
＝理性が“**新たな野蛮**”（＝**管理社会、ファシズム**）を生み出す。  
→これを支える心理的メカニズムが「**権威主義的パーソナリティ**」  
アドルノの同名の著書、フロム『自由からの逃走』  
**自由を重荷と感じた大衆が、権威による束縛を求める**
- ・**批判理論**……理性は、理念に基づいて現実を批判し前進させるものであるべき。  
⇔**道具的理性**は現実への無批判な妥協・迎合に墮落した（＝**伝統理論**）

- ◎ \_\_\_\_\_（1929～フランクフルト学派第2世代）  
『公共性の構造転換』（1962）  
**公共圏**……18世紀欧州では、サロンやカフェで市民たちが民主的に自由に対話・討論できた。  
→しかし19世紀後半、大企業、マス・メディアがこの公共圏を変質させた結果、  
“公論”が、議論や熟考に基づく理性的コンセンサスではなく、世論調査など  
マス・メディアによって造られた「見せかけの公共性」にとってかわられた。

『コミュニケーション的行為の理論』（1981）

- ・失われた公共圏の理想をとりもどす鍵＝**コミュニケーション的合理性**
- ・**対話的理性**……討論によって他者を理解し、意見の一致を得たりする能力

※倫理的に正しい討論が成り立つ条件

- ①. 説得ある矛盾しない議論が行われ、用語が首尾一貫した意味で使用される
- ②. 参加者は自らの利益や状況から離れ、対象となる問題について客観的に思考する
- ③. 参加者が、強制されずに自由に、対等に、討論に参加できる

### 2. 構造主義 (structuralism) — 現代文明批判 その2 —

ある事象の意味を、それ自体に求めるのではなく、  
それらの事象を関連づける社会的・文化的なシステム（構造）から理解する、  
という思想的立場。1960年代にフランス中心に広まる。

- ◎ **ソシュール**（1859-1913、スイスの言語学者）

言語学において構造主義的な理論をとらえた。

- ・シニフィアン（記号表現）……「海」という文字や「うみ」という発音
- ・シニフィエ（記号内容）……上記の「海」が表す内容・意味・概念

シニフィアンとシニフィエの結びつきはそれぞれの社会が恣意的に決めている。  
＝それぞれの社会が、社会の要素を言葉で表現する「体系」を持っている。  
その体系・構造は社会によって違うが、「**体系・構造を持つ**」という点では同じ。

- ◎ \_\_\_\_\_（1908-2009、ブリュッセル生、ユダヤ系フランス人）  
1930-39、サンパウロ大学（ブラジル）教授。アマゾン川支流地域の未開民族の調査。  
著書『野生の思考』（1962）

**文化相対主義**……「未開から文明へ」という考え方は西洋文明中心主義による誤り。  
未開社会の「\_\_\_\_\_」の中にも、固有の構造がある。  
精神性・宗教性・社会組織や規範の合理性は、文明社会のそれに劣らない。

- ◎ \_\_\_\_\_（フランス、1926-84） 著書『狂気の歴史』  
理性は、非理性を“狂気”を区別し抑圧することによって成立。  
しかしその区別は自明のものではない。両者は置換可能。（ex. 天動説と地動説）  
・近代理性主義が、社会の中に抑圧的な権力構造を生んだ。  
（理性による規範からはずれた者を“異質な者”として排除してきた）  
“知”の役割は、「真理がいかにその地位を確立してきたか」の過程を調べること  
**（知の考古学）**

<ポスト構造主義>

- ◎ **デリダ**（1930～、アルジェリア出身、ユダヤ系フランス人）  
“**脱構築**”……西洋の哲学の基礎をいったんくずして、新しい哲学を模索。  
↑ **ロゴス**（言葉）中心主義など

### 3. 分析哲学・科学哲学

#### <分析哲学>

言語の分析……従来の哲学の問題の多くは、言葉の濫用から生じた無意味な問題  
特定の集団にしか理解できない言葉を排除し、公共的な討論ができる場面を作り出すべき。

◎ \_\_\_\_\_ (オーストリア→英、1889-1951、ケンブリッジ大学でラッセルに学ぶ)  
『論理哲学論考』(1922) その結びの言葉  
「語り得ないものについては、沈黙しなければならない」  
神や道徳など現実の事象と対応しないものは、言葉によって論理的に確認できない。

→しかし、後期においては「言語ゲーム」の分析へ  
言語の意味は文法などの客観的根拠によって生み出されているのではなく、  
生活様式というルールを根拠とする言語ゲームの中で生み出される。

◎ラッセル (英、1872-1970) ……『数学原理』(1910)で分析哲学を創始  
言葉や概念の意味を分析することで、哲学と科学とが互いに関係しあって  
前進していくことができる、と考えた。

のち、ラッセル・アインシュタイン宣言 (1955) →パグウォッシュ会議 (1957)  
……核兵器廃絶運動にも尽力

#### <科学哲学>

◎クーン (米、1922 ~ 96) 著書『科学革命の構造』(1962)  
▶ \_\_\_\_\_ ……時代の思考を決める大きな枠組み  
▶ パラダイムシフト (パラダイム転換、パラダイム変換)  
例：天動説から地動説への移行  
単に事実が一つ明らかになったということではなく、  
人間の世界観、宇宙観などが根本的に変化したということ。

→科学史は、連続的な進歩ではなく、断続的なパラダイム転換の歴史である。

◎ポパー (オーストリア、1902-94)  
科学的な命題か、そうでないかを区別する基準は「反証可能性」にあると主張  
弁証法・唯物史観・フランクフルト学派の批判理論を、  
ドグマ (教義) にすぎないと批判

ポパーのこの考え方には、問題点・反対も多い。  
クーンも、パラダイム論の立場からポパーに反対

### 4. 公共性・公正・正義 etc.

◎ハンナ・アーレント (1906-75、ケーニヒスベルク生、ユダヤ系ドイツ人女性)

1924年、マールブルク大学でハイデッガーに会い、哲学にのめり込む。  
のち、フライブルク大学のフッサールのもとで1学期過ごした後、  
ハイデルベルク大学でヤスパースの指導を受ける。

1933年フランス亡命、1940年アメリカ亡命。  
1951年、著書『全体主義の起源』……ファシズム研究  
自律性・自発性・創造性の喪失

↓

1958年、著書『人間の条件』……人間らしさを取り戻すヒント

↓

※古代ギリシア哲学までさかのぼり、人間の生活を大きく2つに分ける

- ・観照的生活「vita contemplativa」  
永遠の真理を探究する哲学者の生活 アリストテレスの「テオリア」
- ・活動的生活「vita activa」 ……これをさらに3つに分類

- ①. 活動 (action / Handeln)  
人と人との間の行為。平等でかつ互いに差異がある人たちの間にのみ成立。  
個々人は自発的な活動の結果として、自身が何者であるかを暴露する。
- ②. 仕事 (work / Herstellen)  
職人的な制作活動 (アリストテレスのポイエシス?) に象徴される、ある特定の目的の達成をめざす行為。「活動」が物語以外の何も残さないのに対し、「仕事」は最終生産物を残す。 後世に残る仕事⇔食いつなぐための労働
- ③. 労働 (labor / Arbeiten)  
生存と繁殖という生物的目的のために、産出と消費というリズムに従って行われる循環的な行為。人間は生存に伴う自然的な必要を満たすために、「労働」を強いられる。それゆえ古来より労働は苦役であり続けたが、マルクスによってもっとも生産的な行為と位置づけられた、と説く。

↓

本来は、「活動」(ことばを媒介とする)によって「公共性」の領域が形成される。

しかし、近代以降、そうした「活動」の特殊性が見失われ、  
「労働」の領域が公共性を占領してしまう傾向がある。

⇔ 再び、言葉を交わし合うことに基礎を置く公共性の意味を再発見すべきである。  
それが、匿名的な大衆支配に基礎を置く全体主義の危険を避けながら  
他者を尊重する民主主義を発展させるために大切なことである

◎**ロールズ** (1921-2002、米)

ハーバード大学教授 著書『正義論』(1971)

社会契約論を評価しつつ、公正な社会の出発点を考察する。

- ・ \_\_\_\_\_ ……社会形成以前の人間のあり方  
(社会契約論では“自然状態”と呼ばれていた)

ここで各人は「\_\_\_\_\_」に覆われている。

これから形成される社会の中で自分がどのような地位を持つのか知らない状態

その上で、自分たちの誰にとっても最良な社会についての、  
最低限のルールをさだめようとしている、と仮定してみる

※その時、彼らは絶対に功利主義を選ばない！  
なぜなら自分が多数派ではなく少数派であるかもしれないから  
「最大多数の最大幸福」という原則は「少数者の不幸」を切り捨てる論理でもある。

ここで同意できるルールは

- ①. 何らかの不平等が起こるとしても、その不平等は、**平等な機会を与えられた全メンバーによる公正な競争の結果生じたものでなければならない。**
- ②. 機会不平等が残るとしても、それは**社会の中で最も不遇な人々の境遇を改善するためのものでなければならない。**

②に関連して「**アファーマティブ・アクション (Affirmative action)**」

弱者集団の不利な現状を、歴史的経緯などを鑑みた上で是正するための改善措置  
ex.黒人やマイノリティに大学の合格枠を一定数保障したりすることなど

◎**アマルティア・セン** (1933-、インド生、ケンブリッジ大学、ハーバード大学など)

経済の分配・公正と貧困・飢餓の研究により 1998年にノーベル経済学賞。

- ・ **潜在能力 (ケイパビリティ)** …… 各人がよりよい生き方を選んでいく自由  
これがどれだけ保障されているか、という観点から福祉を捉え直す。  
「善き生 (well-being)」を「生き方の幅」を基準にはかる。  
→**教育・健康**の改善などが、**経済改革**に先行しなければならない。

「飼いなされた主婦、あきらめきった奴隷は、ほんの少しの幸せでも満足してしまう」  
→弱い立場の人々が潜在能力を生かし社会参加することを主張

数字だけを扱うのではなく、弱い立場の人々の悲しみ、怒り、喜びに  
触れることができなければ、それは経済学ではない

◎**レヴィナス** (ユダヤ系リトアニア人、1906-95) 著書『全体性と無限』

第2次大戦中、ナチスに父母兄弟を虐殺される。

「他性」……他者の最も基本的な特性

「私」とは根本的に同じではあり得ない、ということ

他者は「私」の自己意識の中に取り込めないが故に

圧倒的な重みを持つ存在であり、「無限」である。

「他者の顔」が私を見つめる時、私に他者を受け入れる「倫理的な責任」が生ずる。

⇔ 現代社会は自律的個人を求める。そこでは個人は自分のことで精一杯になってしまい、  
他者を風景としてしか見るができなくなっている。

◎**エドワード・サイード** (1935-2003) 著書『オリエンタリズム』

キリスト教徒のパレスティナ人としてイェルサレム生まれレバノン→アメリカ移住

「東洋」を不気味なもの、異質なものとして規定する西洋の姿勢を**オリエンタリズム**  
と呼び、批判した。それは優越感や傲慢さや偏見と結びつくばかりではなく、欧米の  
帝国主義の基盤ともなった、という。

「東洋」、あるいは自らよりも劣っていると認識される国や文化を、性的に搾取可能  
な女性として描く、といった傾向もある。(具体例：ハーレムやゲイシャ)

※ **ポストコロニアリズム**

第2次大戦後、多くの植民地が独立したが、それらの国々がその後も  
なお植民地主義の影響のもとにある。そうした旧植民地と旧宗主国との  
関係に目を向け、残された課題を問い直そうとする。

-----  
※**リベラリズム**……ロールズ、センなどの立場

修正資本主義、大きな政府 (福祉国家) に対応  
政治的には個人の自由を重視するが、経済的には福祉政策・再分配を重視。

⇓

**リバタリアニズム** (自由至上主義) ……昨今の「小さな政府」への回帰  
政府による再分配政策に反対。個人の権利不可侵こそが正義。

**コミュニタリアニズム**……M.サンデルなど。

共同体 (**community**) の価値を重視。  
ロールズは「社会関係から切り離された個人」を前提にしていると批判。  
個人の権利・正義よりも、共同体の共通善の優位を主張。  
しかしリベラリズムを否定するものではない。

## 現代ヒューマニズム

### <密林の聖者>

◎ \_\_\_\_\_ (独→仏、1875～1965、Albert Schweizer)

現在はフランス領であるアルザス地方に生まれたが、彼が生まれた1875年当時はそこはドイツ領だった。また、彼の名前からして、民族的にはドイツ人である。  
(第一次世界大戦が終わって1919年にアルザス地方はまたフランス領になる。)

牧師の子として生まれた彼は、アルザス地方のシュトラスブルク大学(現フランス地名ストラスブール大学)で、哲学・神学を学び、同大学の講師(1902年、27歳)となる。  
一方で、15歳の時からパイプオルガンも習っていて、1906年には教会のオルガン奏者としての職も得る。(彼はまず偉大なオルガン奏者・バッハ研究者という音楽家として有名になったのである。)  
オルガン奏者として活動するかたわら、30歳を過ぎて1905～11年に医学を学び医者になる。

そして、1913年(第一次世界大戦勃発の前年)に、38歳でアフリカのフランス領コンゴ(現在の国名ガボン)のランバレーネに渡り、そこに病院を建てて医療活動とキリスト教の布教を開始したのである。  
1914年、第一次世界大戦が勃発した際、ランバレーネは前述の通りフランス領であったのに対し、シュヴァイツァーはドイツ国籍であったため、敵国人として捕虜軟禁生活を強いられ、一時は医療活動も禁じられていた。

その間の、1915年頃に「生命への畏敬」という考え方がひらめいた。  
著書『わが生活と思想』にその時の感動が記されている。  
さらに1923年出版の著書『文化と倫理』において、  
「生を維持し促進するものは善であり、生を破壊し生を阻害するものは悪である」という“倫理の根本原理”を確立した。

第1次世界大戦が終わると、アルザス地方がフランス領になったため、彼の国籍もフランス国籍となった。

第2次世界大戦で日本に原爆が投下されたことを知り、「生命への畏敬」の精神に反することとして、原爆に反対すべく原爆に関する資料を蒐集し始めた。  
(彼は、内村鑑三などとの文通で日本のことをよく理解していた、という。)

第2次世界大戦後の1952年、それまでの活動によりノーベル平和賞を授与された。

### < \_\_\_\_\_ (偉大なる魂) >

◎ \_\_\_\_\_ (印、1869～1948)

インド独立運動の指導者。  
インド西部の小さな藩王国の宰相(日本で言うなら、江戸時代の藩における家老にあたる)の家柄に生まれる。(ということは身分が高い。)  
ガンディが生まれたのは、1526年から続いたムガル帝国がイギリスによって1858年に滅ぼされた直後の時期にあたる。しかし、イギリスは従来のインドの支配者層と身分制度(カースト制)を温存し、むしろそれを利用して支配を続けた。  
そのため、ガンディは英語教育を受けることができ、1888～91年にはロンドンに留学し弁護士資格を得て帰国した。  
その後、同じくイギリス支配下にある南アフリカの企業の依頼で、同地に渡りそこで悪名高い黒人差別(人種隔離政策＝アパルトヘイト)の実態を目の当たりにする。企業の依頼をこなした後も南アフリカにとどまり、そこに住むインド系住民への差別撤廃運動を指導して成功した。

第一次世界大戦中の1915年にインドに帰国し、独立運動組織である「国民会議派」に参加する。  
国民会議派は、1906年から \_\_\_\_\_ (国産品愛用)、 \_\_\_\_\_ (自治)といったスローガンを掲げて戦っていたが、ガンディは、大戦中に「戦後はインドに自治権を与える」というイギリスを信じてこれに協力する道をとった。  
しかし戦後、1919年に、イギリスは自治権を与えるどころか、ローラット法と呼ばれる法律で、独立運動を厳しく弾圧した。

これに対してガンディがとった抵抗運動の戦法が、世界史の教科書では「非暴力・不服従運動」と訳されている「 \_\_\_\_\_ 」である。  
この言葉の本来の意味は倫理の教科書にあるとおり「真理の把握」である。  
この運動の本質は、古代インド思想(仏教・ヒンドゥー教など)に共通する戒律である「 \_\_\_\_\_ ( \_\_\_\_\_ )」にある。すなわち生きとし生けるもの全てへの愛であり、全てのものを殺さず、傷つけず、そして暴力で戦わないことである。

彼は、インドの独立に際しては、ヒンドゥー教徒もイスラム教徒も協力して一つの国をつくるべきである、と考えていた。  
しかし、イギリスの策略もあって、両教徒は反目しあい、結局、イギリス領インドは、「インド(ヒンドゥー教)」と「パキスタン(イスラム教徒)」に分裂して独立することになる。そして、彼自身も自分と同じヒンドゥー教徒の青年によって暗殺されるのである。

## <カルカッタの聖女>

◎ \_\_\_\_\_ (ユーゴスラヴィア→インド、1910～97)

現マケドニアの北部スコピエに生まれる。

当時はオスマン・トルコ支配下のアルバニア王国統治下にあった。

(この地方は、文化・宗教の入り組んだ地域でローマ・カトリック教徒はほんの少ししかいない。)

1928年、アイルランドのロレッタ修道会が、修道女をインド・ベンガル州に派遣していることを知り、同修道会入会。アイルランドで2ヶ月勉強して、すぐにインドのダージリンに派遣。のちカルカッタの女子高校で教えるようになる。

1948年(インド独立の翌年)、貧しい人々への奉仕に生きることを決意。

1950年、「神の愛の宣教者会」(修道会)設立。

1952年、「死を待つ人の家(ニルマル・ヒリダイ、=ベンガル語で「清い心の場所」)」設立。

その他、孤児やハンセン病患者のための施設も作る。

「死を待つ人の家」は、最初、周囲の人々から冷たい目で見られていた。

そこに運び込まれるとキリスト教に改宗させられる、と誤解されていたからだ。

しかし、そこでの彼女は、まさに死ぬばかりの人の手を握りながら、

「あなたの宗教で祈りなさい。私は私の言葉で祈ります。」といい、その死後はその人の宗教で葬式をあげていた。

1979年、ノーベル平和賞。

このような賞は、他にもいろいろ受けていたが、彼女はそうしたことを特に拒絶することもなく、むしろ自らの活動費が得られると現実的に考えていたようである。

そうした彼女の考え方をあらわすエピソードとして、来日中に新幹線に乗った際、列車の中の水飲機の所にあった紙コップを見て、「インドにはこうしたものが必要なのにないのです」と言って、たくさん持っていったとか、機内食の余りを全部かついで飛行機を降りたという話があるらしい。「聖女」というよりは「肝っ玉母さん」というべき人柄だったという。

2003年にカトリック教会の「福者」に列せられる。

(そのもう一つ格上の地位が「聖人」)

「愛の反対は憎しみではない。無関心である。」

「この世の最大の不幸は、誰からも自分は必要とされていない、と感じること。」